

八魂一如

題字は木村豊彰・鈴木大拙館長

48

能登空港を目指し、20日、能越道を北上した。能登空港ターミナルビルで開かれる「奥能登塾」で「土徳」に関する講演が行われると聞いたからだ。

人を育む土地の力であり、南砺市の総合戦略に「土徳のまち創造」として盛り込まれている「土徳」。それに光を当てる動きが能登でも起きている。

能登も「土徳」の地
奥能登塾は昨年6月、地域おこしに取り組む有志や石川県の呼びかけで発足した。「土徳」について講演したのは、珠洲市の真宗大

谷派西勝寺住職の西山郷史さん(71)。能登の民俗に詳しく、かつて市立珠洲焼資料館長を務めた人だ。

西山さんの言葉が、すっと胸に入ってきた。「能登は優しや、土までも」と言います。土も優しいが、あれも優しい、これも優しい。その全てを包み込んだ言葉が土徳です。

まとめ③

第1章 はぐくみの大地

南砺も能登も「土徳」の地であり、響き合う部分がある。そのことは能登の七尾市出身で城端別院輪番の亀淵卓さん(64)の言葉からも分かる。「能登からすると『一番近い別院』は城端別院なんです。能登は農民文化で南砺と相通じる」

連携し、高め合う

「妙好人 千代尼」
西山さんは1月に「妙好人 千代尼」(法蔵館)という本を出した。千代尼は江戸時代の松任(現・白山市)の俳人で「朝顔や つるべ取られて もらい水」の句が有名である。本によると、もともとは「朝顔に」だったが、千代尼は35歳ごろに「朝顔や」とした。朝顔という命と、水をくみに出られることを「おかげさま」と捉える千代尼という「いのちをいだいているもの同士」が出会い、その詠嘆が「や」に現れたという。

8町村が合併した南砺市には「八つの魂」があり、異なる個性を大事にしながら、根底では「一つ」である。そんな思いを「八魂一如」という連載タイトルに込めた。

越中・能登・加賀も同じだ。それぞれに個性があり、

「加越能一如」な県内はもちろん、沢、小松など加越僧侶が法話をしに

「奥能登塾」で「土徳」を語る西山さん
|| 能登空港

「金沢・南砺ゆかりの集い」で交流する参加者 || 金沢市内

生産や販売本格始動

22日にロゴデザインとキャッチコピーが発表された富山米新品種「富富富」では、県内外の農業、飲食店関係者が生産や販売の取り組みを本格的に始動させた。富山ゆかりの著名人も応援のメッセージを寄せ、今秋の新たな富山米の市場デビューに向け、期待が一気に高まった。

人が出席した。栽培マニュアルが配られ、生産の注意点や食味評価の結果が紹介された。

期待一気に

伊藤孝邦県農協中央会長らがあいさつ。高田法定農業者法人代表がブランド



富に切り替える意向を明らかにした。茂出木さんは昨年末から東京の店舗では一部で富富富を使っていると明かし、「しっかりと歯ごたえと自然な甘みがある。妙めこ飯など昔ながらの洋食に合う」と評価した。

3月6日まで。美術館3階アトリエでは、県内の小中学生が「富富富」に合うおかずを描いた角風船の展示が始まり、ムードを盛り上げた。

リオデジャネーリスの登坂絵岡市出身は「す思い、富富富を感じるとし中村孝明さんはおいしい米で大た」、落語家立ん(射水市出身)